

東洋医学の本質を探るⅡ

漢方・鍼灸を基礎づける思想とは何か

『黄帝内経』入門

東洋医学基礎 特別講座
於・医科歯科大学

2015.5.30

「松塾」主宰 松田博公

重廣補註黃帝內經素問卷第一

新校正云按王氏不解所以名素問之義及素問之名起於何代按隋經籍志始有素問之名甲乙經序晉皇甫謐之文已云素問論病精辨王叔和四時脈經云出素問鍼經漢張仲景撰傷寒卒病論集云撰用素問是則素問之名著於隋志上見於漢代也自仲景已前無文可見莫得而知據今世所存之書則素問之名起漢世也所以名素問之義全元起有說云素者本也問者黃帝問岐伯也方陳性情之源五行之本故曰素問元起雖有此解義未其明按乾鑿度云夫有形者生於無形故有太易有太初有太始有太素太易者未見氣也太初者氣之始也太始者形之始也太素者質之始也氣形質具而病

啓享次註林億孫奇高樞等奉敕校正孫兆重改誤

上古天真論

四氣調神大論

生氣通天論

金匱真言論

上古天真論篇第一

新校正云按全元起注本在第九卷王氏重次篇第移冠篇首今注逐篇必具全元起本之卷

內經一

六

三文

第者欲存素問舊第目見今之篇冊次皆王氏之所移也

昔在黃帝生而神靈弱而能言幼而徇齊長而敦敏

成而登天

有能國君少典之子姓公孫徇疾也敦信也敏達也習用于戈以征不享平定天下殄滅蚩尤以土德王都軒轅之丘故號之曰軒轅黃帝後鑄鼎於鼎湖山鼎成而白日升天羣臣莽衣冠於橋山墓今猶在

之人春秋皆度百歲而動作不衰今時之人年半百

而動作皆衰者時世異耶人將失之耶

曰上古之人其知道者法於陰陽和於術數

謂知修養之道也夫陰陽者天地之常道術數者保生之大倫故修養者必謹先之老子曰萬物負陰而抱陽坤氣以爲和四氣調神大論曰陰陽四時者萬物之終始死生之本逆之則災害生從之則苛疾不起是謂得道此之謂也

食飲有節起居有常不妄

作勞

飲食者充虛之滋味起居者動止之綱紀故修養者謹而行之痺論曰飲食自倍腸胃乃傷生氣通天論曰起居如驚神氣乃浮是惡妄動也

明·顧從德本『重廣補注黃帝內經素問』



日本で入手しやすい注釈書：

石田秀実監訳『現代語訳 黄帝内経素問』『現代語訳 黄帝内経霊枢』
(東洋学術出版社)

家本誠一著『黄帝内経素問訳注』『黄帝内経霊枢訳注』(医道の日本社)

『素問』『靈樞』をどう位置づけるか

- 『素問』『靈樞』(ここでは便宜的に『黄帝内経』と呼ぶ)は、約2000年前の中国・漢代に編纂された最古の総合医書である。
- それ以後の漢方書、鍼灸書の基準となった原理的書物である。
- 異なる時代の異なる理論、技術が述べられているが、そこから中国古代医学の「原型」の思想を取り出すことができる。
- その意味で、「バイブル(聖書)」に似ている。

バイブルには読み方がある

- バイブルはそれ自体が丸ごと理解されなければならない。
- しかし、例えば日本の鍼灸界ではおかしな読み方が行われてきた。
 - 異なる民族の異なる文化、思想が生んだ医書という緊張感なく、辞書を引けば読める書物のように接する。
 - 自分の臨床に都合のよい技術的記述をつまみぐい。宇宙論、天文暦法、数術などはどうでもいいと読み飛ばす。
 - 『素問』のはじめの篇だけ読んで、『黄帝内経』は「養生の書」と誤解する。（『黄帝内経』は「生き方の書」である。）

丸ごと読んだ人はどう言っているか

- 中華民国の名医、惲鉄樵（うんてつしょう、1878年～1935年）

「内経全書はみな天をいう」

（『群経見智録』1922年）

- 現代の中西医结合派の大家、趙洪鈞（ちょうこうきん）

「『内経』の体系は天人相応の体系である」

（「《内経》的体系和方法」『《内経》時代』2012年）

「黄帝」のタイトルは中味を表す？

- 『漢書』芸文志は前漢末の宮廷図書目録『七略』を引用する。そこには、25冊あまりの「黄帝」書が記載され、『黄帝内経十八卷』のタイトルもある。
- これらの書になぜ「黄帝」と付けられているか。
- 研究ブームは、1972年、長沙・馬王堆漢墓の発掘がきっかけ。
- 漢墓から現れた4冊の政治書を、芸文志が記載する『黄帝四経』と研究者は推測した。

浅野裕一の説

- 浅野裕一は『黄老道の成立と展開』（創文社、1992年）で、「黄帝」思想を定義した。
- 「日月、星、四季の周期性を天の理法と捉え、政事、軍事を行えば国は栄えるが、そうしなければ亡びるとする「天道」思想である」
- この説を『黄帝内経』に当てはめると。
- 「『黄帝内経』とは、天地の気の循環と四季の変化の法則に則り医療を行う天人合一の医書である」と、読まなくてもタイトルだけで推測できることになる。
- 前漢末の『黄帝内経十八卷』は、後漢以降、『黄帝内経素問』『黄帝内経靈枢』が編纂される際、中心になったと考えられる。だから、この性格は、いまわたしたちが読んでいる『素問』『靈枢』にも刻印されている？

人は天地から生まれる

- 「それ、人は地に生まれ、命を天に懸(か)く。天地気を合する、これを命(なづけ)て人という。人よく四時に応ずる者は、天地これが父母となる。万物を知る者は之を天の子と謂う。」(『素問』宝命全形論)
- 「人と天地相参じ、日月と相応じるなり。ゆえに月満つれば海水西に盛んにして、人の血気積み、肌肉充ち、皮膚緻(こま)かく、毛髪堅く、腠理とじ、煙垢[えんこう、脂垢]著(つ)く。この時に当たり、賊風に遭うといえども、その入るや浅くて深からず。」(『靈枢』歳露論篇)

人と天地は一体で、構造も機能も同じ

- 「天は円く地は方なり。人の頭は円く足は方にしてもって之に応ず。天に日月有り、人に両目有り。地に九州有り、人に九竅有り。天に風雨有り、人に喜怒有り。天に雷電有り、人に音声有り。天に四時有り、人に四肢有り。天に五音有り、人に五藏有り。天に六律有り、人に六府有り。天に冬夏有り、人に寒熱有り。天に十日有り、人に手十指有り。」(『靈樞』邪客篇)
- 十二経脈も、大地の十二河川と繋がっている。
- 「経脈十二は、外は十二経水に合して、内は五藏六府に属す。(略)五藏六府、十二経水は[繋がり]、外に源泉ありて内に稟(う)くる所あり。これ皆内外相い貫きて、環の端(はし)なきが如し。人の経もまた然り。」(『靈樞』経水篇)

宇宙－国家－人体ネットワーク

- 「心なる者は君主の官なり。神明これより出づ。肺は相傳(そうふ)の官(=宰相)なり。治節これより出ず。肝は將軍の官なり。謀慮これより出ず。胆は中正の官なり。決断これより出ず。膻中は臣使の官なり。喜樂これより出ず。脾胃は倉廩(そうりん)の官なり。五味これより出ず。(略)故に主(=君主、心)明かなれば則ち下、安んじ、これを以て生を養えば則ち寿、世を歿(お)うるまで殆(あやうから)ず。以て天下を為(おさ)むれば則ち大いに昌(さか)んなり。主、明かならざれば則ち十二官危うし。使道(=気血の道)閉塞して通ぜず。形乃ち大いに傷る。これを以て生を養えば則ち殃(わざわい)あり。以て天下を為める者は、其の宗(=国家、民族)大いに危うし」(『素問』靈蘭秘典論篇)

天地も陰陽、人体も陰陽

- 「陰陽は天地の道なり。万物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府なり。病を治するに必ず本を求めよ。故に積陽は天と為り、積陰は地と為り。陰は静、陽は躁なり。陽は生じ、陰は長ず。陽は殺らし、陰は蔵す。陽は氣と化し、陰は形を成す。寒極まれば熱を生じ、熱極まれば寒を生ず。寒氣は濁を生じ、熱氣は清を生ず。清氣は下に在れば、則ち飡泄を生じ、濁氣は上に在れば、則ち臍脹を生ず。(略)故に清陽は天と為り、濁陰は地と為る。地氣は上りて雲と為り、天氣は下りて雨と為る。雨は地氣より出で、雲は天氣より出づ。故に清陽は上竅より出で、濁陰は下竅より出づ。清陽は腠理に發し、濁陰は五蔵に走る。清陽は四支を實し、濁陰は六府に歸す。」(『素問』陰陽応象大論篇)
- 「ゆえに天を陽となし、地を陰となす。腰以上を陽となし、腰以下を陰となす。」(『靈樞』經水篇)

天地の万物は五行、人体も五行

- 「帝曰く、五蔵は四時に応ずる。各々収受するところ有るか。岐伯曰く、有り。東方は青色、入りて肝に通じ、竅を目に開く。精を肝に蔵す。其の病むは驚駭を発す。其の味は酸、其の類は草木、其の畜は雞、其の穀は麦なり。其の四時に応ずるや、上は歳星と為る。是れ以て春気は頭に在るなり。其の音は角、その数は八、是れ以て病の筋に在るを知るなり。其の臭は臊なり。」(『素問』金匱真言論篇)

宇宙の天地人三層構造

- 「賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象(かた)どりて以て足を養い、中は人事に傍(なら)いて以て五藏を養う」(『素問』陰陽応象大論篇)
- 「夫れ道なるものは、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知れば、以て長久すべし」(『素問』氣交變大論篇)

- 「岐伯曰く、下部有り、中部有り、上部有り。部に各々三候有り。
三候は天有り、地有り、人有るなり。必ず指して之を導けば、乃ち以て真たり。

上部の天—両額の動脈、上部の地—両頬の動脈、上部の人—
耳前の動脈

中部の天—手の太陰、中部の地—手の陽明、中部の人—手の
少陰

下部の天—足の厥陰、下部の地—足の少陰、下部の人—足の
太陰

故に下部の天は以て肝を候(うかが)い、地は以て腎を候い、
人は以て脾胃の気を候うと。帝曰く、中部の候、奈何と。

岐伯曰く、亦、天有り、亦、地有り、亦、人有り。天は以て肺
を候い、地は以て胸中の気を候い、人は以て心を候うと。

帝曰く、上部、何を以てか之を候わんと。

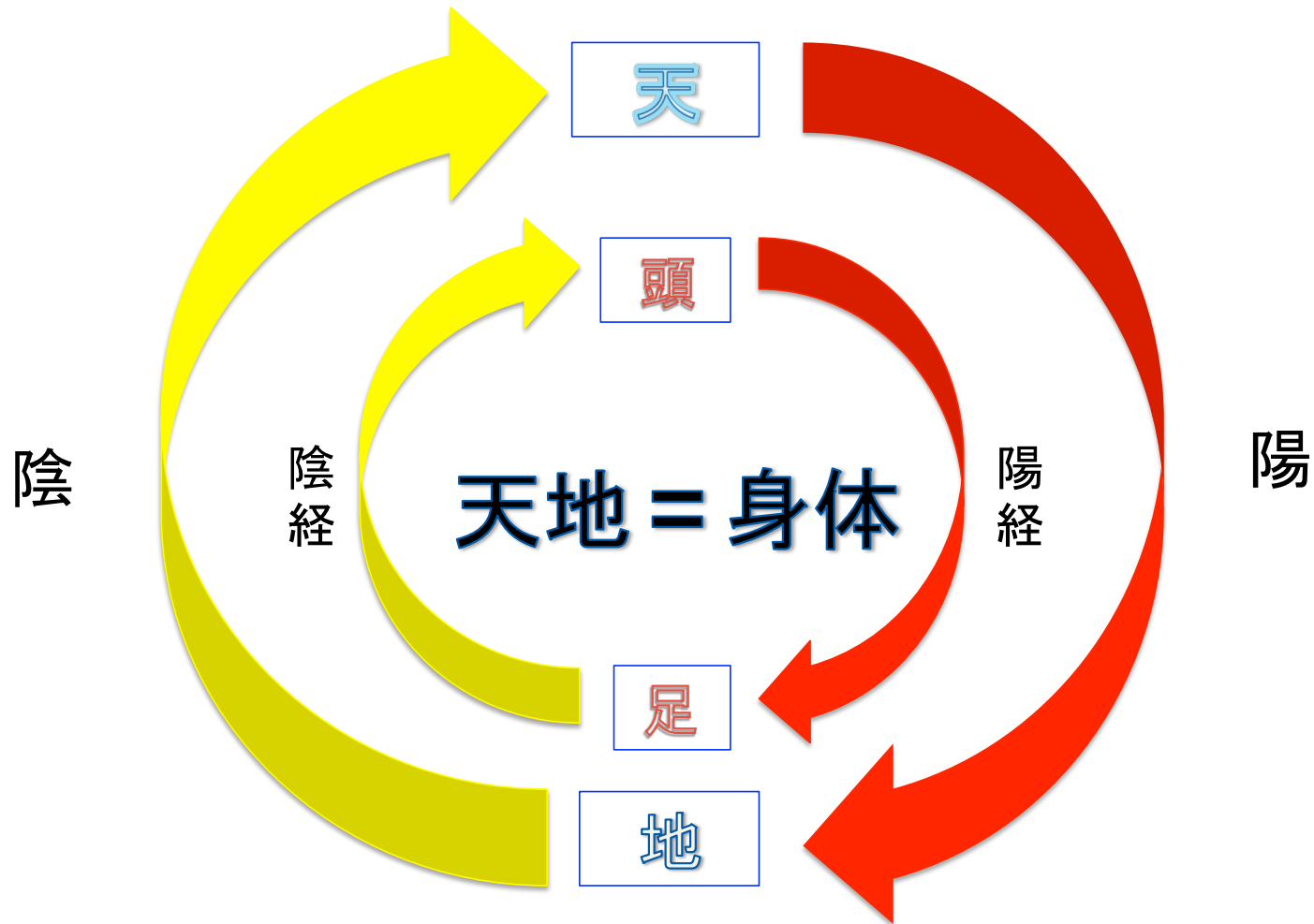
岐伯曰く、亦、天有り、亦、地有り、亦、人有り。天は以て頭
角の気を候い、地は以て口齒の気を候い、人は以て耳目の気
を候う。三部なるものは各々天有り、各々地有り、各々人有り。
三にして天を成し、三にして地を成し、三にして人を成す。」

(『素問』三部九候論篇)

天地の気も人体の気も循環する

- 天地宇宙の気は二元、三元、五元などの構造を持つ。
- それが終わりなく循環することに中国人は注目し、特に重要な「天道」の法則とみた。
- 上下する天地の気、春夏秋冬の四時、日の出と日没、月の出と月の入り、北斗七星の柄の運行や動植物が生長收藏する生命のリズムを観察し、「循環の原理」をあらゆる存在に当てはまり、政治や人生の基準ともなる摂理として取り出した。
- 秦帝国成立直前に成立した政治書『呂氏春秋』も、宇宙の真理として「円道」の思想を謳いあげる。
- 『黄帝内経』にも、人体の気は天地の気のように無始無終に循環するという認識が繰り返し述べられる。
- それが循環する十二経脈論の宇宙論的根拠となる。

陽の気は下がり、陰の気は上がる



「環(たまき)の端なきが如し」

- 「清陽は天に上り、濁陰は地に帰す。是の故に、天地の動靜、神明は之[氣の上下の循環]を綱紀と為す。故に[四時は]能く以て生長收藏し、終わりにて復た始まる」(『素問』陰陽応象大論篇)
- 「経脈は流行して止まず、環周して休まず。寒氣経に入りて稽遲[留止、徐行]すれば泣(しぶ)りて行らず。脈外に客するとき血少なし。脈中に客するとき氣通ぜず。故に卒然として痛むなり」(『素問』拳痛論篇)
- 「氣の行くことなきを得ざるや、水の流るるが如く、日月の行の休まざるが如し。故に陰脈はその蔵を営し、陽脈はその府を営し、環の端なきが如く、その紀(はじめ)を知ることなく、終わりにてまた始まる。その流溢の氣は、内は藏府に漑(そそ)ぎ、外は腠理を濡(うるお)す」(『靈樞』脈度篇)

天地人は「数」で繋がる

- ツボの数は1年の日数に対応する
- 「黄帝問うて曰く、余聞くに、気穴三百六十五はもって一歳に応ずと。未だ其の所を知らず。願わくば卒く之を聞かん、と。岐伯稽首、再拜して対えて曰く、(略)凡そ三百六十五穴は鍼の由りて行く所なり、と」(『素問』気穴論篇)
- 「歳に三百六十五日有り。人に三百六十節有り、地に高山有り、人に肩膝有り、地に深谷有り」(『靈樞』邪客篇)
- 「計(かぞ)うるに人もまた三百六十五節有りて、以って天地を爲して久し」(『素問』六節藏象論篇)

- 「数」の神秘主義的な使用法は世界中にある。
レヴィ・ブリュル著『未開社会の思惟』（岩波文庫）
- その中国的方法が、「数術」「術数」である。
- 「数」を近代的、合理的な計算の道具として使うのでもなく、「数」の語呂合わせでもない。
- 万物が「数」で数えられることを理由に、**天地宇宙のすべてが繋がり一体であることを確認するための方法**である。
- 日本の『黄帝内経』研究では、江戸中期の安藤昌益を除き、現在まで無視されてきた。

- 数術には、基準となる特に聖化された数がある。
- それを「天数」と呼ぶことが示すように、第一次的には天文暦法に関わる。
- 五蔵六府の「五」「六」は暦の十干十二支の60年周期と関係する「天六地五」の数から来ている。
- 十二経脈は1年十二ヵ月、二十四脈は二十四節気、二十八脈は天空の二十八宿星座、三の重視は天地人三層構造と関連する。
- 戦国時代には楽律がギリシャのピタゴラスと同じ「三分損益法」で作り出され、三とその倍数の六、九、二十七、八十一などが聖化された。
- 音楽は天とひとを繋ぎ国家を安泰にさせる政治の道具として、儒家が重視した。
- 『黄帝内経』には、陰の六律、陽の六律、合わせて十二律が十二経脈を作った、と書かれている。五蔵は五音と感応するとされた。それらが音楽療法の起源にもなっている。
- そのほか、周易と関連する数も少しある。

- 「六なるものは律なり。律なるものは陰陽四時を調えて十二経脈を合す。」(『靈枢』九鍼論篇)
- 「人の天道に合するや、内に五蔵有り、以って五音、五色、五時、五味、五位に應ずるなり。外に六府有り、以って六律に應じ、六律は陰陽諸経を建てて之を十二月、十二辰、十二節、十二経水、十二時、十二経脈に合する者なり。此れ五蔵六府の天道に應ずるゆえんなり。」(『靈枢』経別篇)
- 「天は円く地は方なり。人の頭は円く足は方にしてもって之に應ず。天に日月有り、人に兩目有り。地に九州有り、人に九竅有り。天に風雨有り、人に喜怒有り。天に雷電有り、人に音声有り。天に四時有り、人に四肢有り。天に五音有り、人に五蔵有り。天に六律有り、人に六府有り。天に冬夏有り、人に寒熱有り。天に十日有り、人に手十指有り。(略)天に陰陽有り、人に夫妻有り。歳に三百六十五日有り、人に三百六十節有り。」(『靈枢』邪客篇)

生き方も治療も天地の法則に則るべし

- 「陰陽四時は万物の終始なり。死生の本なり。之に逆えば則ち災害生じ、之に従えば則ち苛疾起らず。是を道を得たりと謂うなり。陰陽に従えば則ち生き、これに逆えば則ち死す。これに従えば則ち治し、これに逆えば則ち乱れる。」
(『素問』四氣調神大論篇)
- 「春は生じ、夏は長じ、秋は收め、冬は蔵する。是れ気の常なり。人また之に応ず。以って一日を分けて四時となし、朝は則ち春となし、日中は夏となし、日の入りは秋となし、夜半は冬となすなり、人も亦たこれに応ず。(略)天の時に順えば、すなわち病、期を与うべし。順う者は工たり、逆らう者は麤(そ)たり。」(『靈樞』順氣一日分為四時篇)
- 「賢人は上は天に配して以て頭を養い、下は地に象りて以て足を養い、中は人事に傍いて以て五蔵を養う。(略)治するに天の紀に法らず、地の理を用いざれば、則ち災害至るなり。」(『素問』陰陽応象大論篇)

臨床論も天地論から体系化された

- ひととは天地の気から生まれ、四季の気に育てられ、構造も機能も天地と同じである。
- 天地宇宙の万物も国家も人体もすべて繋がっている。ひとの身体の數も天数と一致している。
- 中国古代医学の経脈論、蔵府論、病理学、診断治療論も、この「**天地宇宙教**」の思想、哲学、宗教觀の枠組みに従って言語化され体系化される。

- **経脈論** [十二月、十二河川、十二樂律]
[天地の気の陰陽・上下の循環]
- **蔵府論** [天六地五→十一経脈論]
- **病理学** [気の停滞、上実下虚 (= 頭熱足寒)]
- **治療論** [四季に応じた脈診]
[天氣・邪気の虚実を補瀉]

ところで、中国古代の世界図式は？

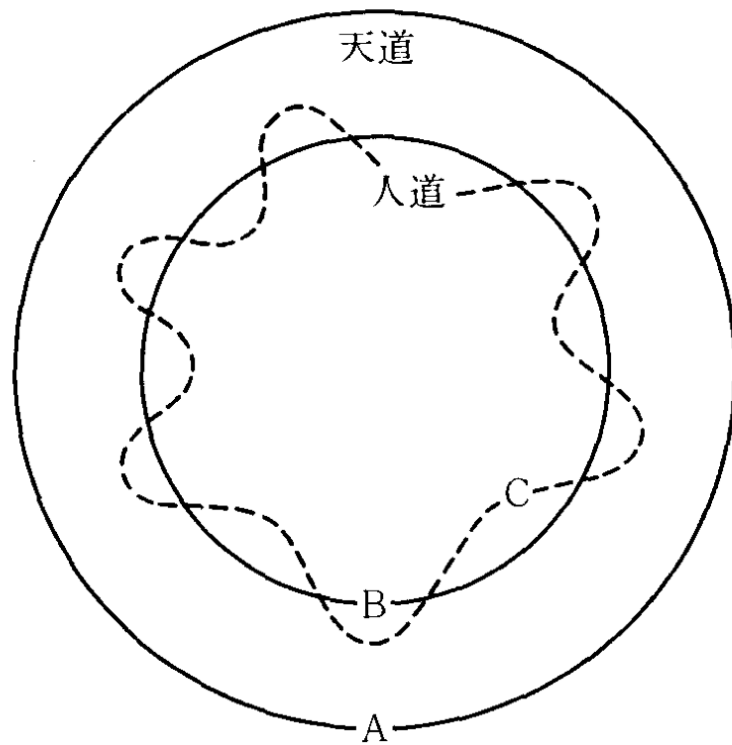


図-II 古代中国の世界像

- 中国の宇宙観は同心円で描ける。
- (A)が天道で、「四時(春夏秋冬)たがわない」規則性をで永遠に循環する。(B)が人で、聖人は「天人合一」し、天道と完全に同心円を描く。
- 普通の人間は、(C)のように曲がりながらゆく。欲や「作為」によって妨げられて軌道がそれる。
- 「道」を求めるとは、自然をモデルに、それに近づくよう努力することである。これを自然法的な歴史観といふことができる。
- 儒教と老荘のように正反対の教えでも、その点は共通し、これが中国思想の「原型」である。」(丸山眞男「日本思想史における「古層」の問題」)

この世界像は『黄帝内経』にぴったり

- この世界像は、『黄帝内経』の「天人合一」医学にそのまま当てはまる。
- ひとの心身は天道と同心円を描き、四時のような規則性を持っていると健康である。
- それは聖人、真人、至人のみが可能で、普通の人間は同心円の線から外れて曲がった人生の軌跡を描くので病気になる。
- そこで治療をし、天道に見合った同心円の人生の軌跡を描くのを助けるのが医療である。
- 政治も医学も同じく自然法的な宇宙像(天に法り、地に則る)をモデルにしている。

政治書と医書が同じ発想をしている

- 前漢中期の儒者・董仲舒の著書とされる政治書『春秋繁露』の「人副天数（人、天数にそう）」篇には、『靈枢』邪客篇と瓜二つの天人合一身体論が展開される。
- 『黄帝内经』の思想が誕生した時を示唆している。
- 「ただ人のみ独り能く天地に偶す。人に三百六十節有るは、天之数に偶す。形体骨肉は、地の厚きに偶す。上に耳目の聡明有るは、日月の象なり。体に空竅理脈有るは、川谷の象なり。心に哀楽喜怒有るは、神気の類なり。(略) 天地の符、陰陽の副、常に身に設けらるれば、身はなほ天のごとし。数と之と相参わる、故に命と之と相連なるなり。天は終歳の数に以て、人の身を成す。故に小節三百六十六は、日の数に副う。大節十二分は、月の数に副う。内に五蔵有るは、五行の数に副う。外に四肢有るは、四時の数に副う。乍（たちま）ち視乍ち瞑きは、昼夜に副う。乍ち剛乍ち柔なるは、冬夏に副う。乍ち哀乍ち楽なるは、陰陽に副う。心に計慮有るは、度数に副う。行いに倫理有るは、天地に副う。」

原理論・段階論・現状論を区別する

- **原理論**：『黄帝内经』 天人合一 生き方
気の循環
陰陽・五行
- **段階論**：『傷寒論』 インド医学、 生き方と
『難経』 道教・儒教・ 養生の分離
唐・宋・元・ 易の影響
明・清の医学
- **現状論**：中華民国 現代医学 養生
中医学 の影響 予防医学

『黄帝内経』が教えてくれること

(1) 漢方・鍼灸の実践論、技術論を、大きな臨床の視野から根拠づけることができる。

『黄帝内経』は「養生の書」ではなく、天地とともに生きる「生き方の書」である。

(2) 西洋中世の修道院医療、アーユルヴェーダ、チベット医学、アメリカのネイティブ医療など、世界の伝統医療共通の臨床思想を確認できる。

ひとは天地の気から生まれ、自然に育まれ、病み、癒され、そして再び天地の気に還っていく。

(3) 日本漢方・鍼灸の思想を照らし出す「鏡」を持つことができる。

日本漢方・鍼灸は、中国医学の日本的な変容形である。違いを知るには、『黄帝内経』という「原型」と比較すると分かりやすい。

[まとめ]

「内経全書は みな天をいら」

(惲鉄樵『群経見智録』)